A Brief Note No. 211

発行日：２０１２年2月１０日

おもちゃドクター奮戦記

千葉市花見川区　　小林　敬

＜１＞いきさつ篇その１

いつの日からか、こわれた物を自分で直す（正確には「直そうとする」）ようになった。

石油ストーブの芯の交換、ドライヤーのコードが切れた、トースターが上がってこなくなったなどなど、家の中には故障や不具合は沢山あった。我が家では、具合が悪くなったら、「捨てる・買い替える」などの判断の前に、「直せるか？」の判断が入るのが日常化していた。

また、平成時代に入ると一般家庭にパソコンが普及し始めて、知り合いで不慣れな初心者の方から問い合わせやサポート依頼を受けることが多くなってきた。

ある日、日経産業新聞の広告で「家電修理技術者養成の通信教育」があることを知った。

平成 12 年 2 月末、文部省認定社会通信教育「新家電　技術講座」の受講を開始し、引き続き「新家電　実務講座」（ふたつ合わせて 9 カ月）の受講をした。新しい時代の家電製品の修理技術の習得が目標の技術講座は、「電子・電気の基礎知識」で始まり、「ラジオと音響」、「テレビジョン」、「家庭情報・通信」、「マルチメディアの広がり」と続き、実務講座は、「新しい家電ビジネスとアフターサービスの基礎」、「ＣＳ活動とアフターサービス」、「製品安全とアフターサービス」、「販売実務と法知識」と続く。

6 ヶ月で無事受講を修了すると、「家庭電器修理技士　初級」という民間資格が付与された。この状態で実務経験を二年積むと二級の資格が得られるようだった。定年退職後に役立つかも・・・との思いがよぎった。

工業高校の電気科を卒業してコンピュータの保守サービスを業として来たことが幸いして、通信教育で毎月提出するペーパーテストの成績は平均 90 点以上を確保することができたことから、「生涯学習インストラクター二級の取得を目指した通信教育の優先受講が可能」という促しが通信教育の会社から送られてきた。

引き続きこれも受講して見ることにした。4 か月で修了して「生涯学習インストラクター二級」の証を手に入れたところ、今度は「生涯学習インストラクター一級」取得を促すレターが送られてきた。もうついでだからやってみよう、と思いきってこれにも挑んでみた。

平成 13 年夏、生涯学習インストラクター一級の証を手にした所で、この長丁場は終わった。

＜２＞いきさつ篇その２

平成 16 年 9 月末定年退職。何か今までとは違う仕事して見るのも悪くないなと思い、雇用延長の手続きはせずハローワークに登録して再就職先探しを始めるとともに人材銀行・雇用能力開発機構・シルバー人材センター・生涯学習センターなどにプロフィールを登録してみた。

平成 19 年のある日、千葉市生涯学習センターから一本の電話が入った。

「生涯学習ボランティアのすすめ　～地域デビューのために～」という 55 歳以上の人を対象にした講座を開設するにあたり、この講座の中で開くパネルディスカッションにパネラーとして参加して欲しいというものだった。生涯学習センター側では、登録されている情報の中からユニークな活動をしている人を 4 人探してお願いしているとのことだった。（登録している内容については紙面の都合上ここでは詳述省略）

4 人のパネラーがプレゼンテーションを行った後、ディスカッションと質疑応答が行われた。

私は「私流の生涯学習とボランティア」というタイトルで 15 分程のプレゼンテーションを行った。

ステージに上がった私以外の三人の方の活動は確かにユニークな興味深いものだったが、特に私の隣の席に座ったＹさんと言う方のプレゼンテーションには、パネラーの立場も忘れて聞き入ってしまった。

「千葉おもちゃ病院」というおもちゃを直すボランティア活動をしているということだった。

「これがやりたかったことかもしれない！！」と閃いたものがあった。講座終了後に細かい話をお聞きし、早速現場を見学させていただくことにした。千葉おもちゃ病院の活動現場を見学に行き、そのまま入会することにした。

並行して、日本おもちゃ病院協会という上位の団体が「おもちゃドクター講座」を開いていることを知り、平成 19 年 10 月に初級講座を受講し、協会の会員にもなった。

そして、「社会人落語の活動」「おもちゃ病院の活動」「畑で野菜作りの遊び」の三本立てに、時々入ってくる「初心者へのパソコンサポート」を加えた生活パターンに落ち着いてきた。

＜３＞おもちゃドクター活動開始

千葉市ハーモニープラザで毎月第二／第四土曜日の午後に開院している千葉おもちゃ病院での活動が始まった。始めの内は緊張感と、直らなかったら・・・、壊してしまったら・・・という不安に包まれて、終わって自宅に帰ると「ああ、無事終わって良かった」とため息が出た日もあったが、経験を重ねて行くにつれてリラックスしてできるようになってきた。

驚いたことに、おもちゃドクターの方々の前歴は理工系の方が多いと思っていたが、文系の方が多く、また私の後に女性も入ってきた。確かに、私のように仕事として各種工具・テスター・半田ごて等を使った経験があると入って行きやすいような気はするが、実際の作業現場になると、木工・金工の技が必要なこともあるし、自動車や飛行機の知識が役に立つこともあり、折り紙や裁縫の技術も必要になる。多岐にわたるおもちゃの世界では、「これが必要」という唯一の知識・技術など存在しないようだ。

「過去の経験」よりも「これから積み上げて行く経験」の方が遥かに大事であると実感した。

やがて千葉市に新しくできた子ども交流館でも毎月第三土曜日に開院することになり、月に三回の活動になった。回を重ねるごとに新しい体験が待ち構えており、当初の緊張に変わって面白さが出てきた。

おもちゃの修理依頼に来る「患者さん」は、若い親子連れが一番多いが、時にはおじいちゃんやおばあちゃんが息子（娘）が使ったおもちゃを孫にも使わせてやろうと思って、押し入れから出して見たら動かなかったと言って持ってくることもある。

また、時には海外在住時に滞在先で買ったおもちゃ等、その人にとって思い入れがあるおもちゃを持ってくる人もいる。我が手ひとつで思い出を蘇らせることができるか、それとも・・・という責任重大な仕事になることもある。

何よりも、無事直ったおもちゃを引き取りに来た子ども達が、うれしそうな顔で受け取って「ありがとう」と言って帰る姿を見るのが一番うれしい瞬間である。

＜４＞少しばかり宣伝を

少しばかり慣れてきて、面白くなってきたので、我が家の門口にポスター掲示をして見た。門口にポスターを貼ると近所にばれてしまうという照れくささもあったが、結果的に掲示して良かった。

近所の子ども、散歩中の夫婦や親子などがこれを見て反応するようになってきた。ひとつ・ふたつと患者が来るようになってきたら照れくささもなくなり、今では手製の看板まで設置

するようになった。
　近所の人は顔見知りなので、修理に不具合があると大変だと心配はしたが、今のところ不具合はない。
　日が経つにつれて、この宣伝の効果は思わぬ形で現れてきた。
　「温室のヒーターが温かくならない」、「虫よけの誘蛾灯が壊れた」、「カセットデッキが･･･」などなど、おもちゃの領域を離れて家電までが登場するようになってきた。コードの断線などの単純な故障の場合は受けてあげることがあるが、物によっては危険性もあるので丁重にお断りすることもある。
　やがて多数の患者が尋ねて来るようになったら、どこか公共の場所を借りて定期開催するのもいいなと思っているが・・・・・。

＜５＞こんなことがある（たかが・・・されど・・・）
　電池を使ったおもちゃが多いのが近年のおもちゃの特徴で、木や金物のおもちゃで育った世代の方には驚きの変化だと思う。動かす・音を出すなどの機能を持つおもちゃは電池が命である。
　若いお母さんがおもちゃを持ってきた。受付時の問診で、「電池は替えて見ましたか？」「・・・・・」。
　「えーっ、電池が入っていたんですかぁ？」とか「電池って替えなきゃいけないんですかぁ？」
　こういう信じがたい場面をたまに経験することがある。
　電池を入れっぱなしにしておもちゃを長い間しまって置いたら、電池が液漏れしてしまった。液が漏れた直後ならクリーニングすればＯＫになることが多いが、このまま何日も放置すると周辺の金属が腐食してしまい、被害が大きく広がることが多い。電池ボックスの電極損傷ぐらいで済めば良いが、最悪の場合内部に液が流れ込んで、メカや電気回路を壊してしまうこともある。
　「百円ショップで買った電池を使ったら、すぐに電池切れになった」とか、「正規の電圧が出ない電池があった」というような事件もかなり体験した。
　電池の「＋側」の突起のサイズと電池ボックスの形状との関係で、＋極の接触が不完全になり、間欠的に電圧が供給されなくなるという問題に遭遇することがある。「新品の電池を入れたのにダメ」、「電池の電圧を確認してから入れたのにダメ」という申告があると、このことを疑う。
　いずれにせよ、「たかが電池、されど電池」である。家庭の生活ばかりでなく、おもちゃの世界でも「電気に極度に依存し過ぎている生活」が垣間見られる。

＜６＞活動を通じて見えてくる物
　昨今、こわれた物を安易に捨てることなく、「頭陀袋のように破れたら縫い破れたら縫い」の気持ちで直して直して執着して使いこなすという我慢強さが失せつつある。「物を大事にする心」は、親のふるまいを見て子どもが学ぶことかもしれない。そんな意味で、おもちゃ病院の扉を開けて入ってきてくれることだけで、喜ばしい風潮だと思うことが多い。
　「友達から譲ってもらったものなんですが、動かないんです・・・」と言って持ってくる親が少しずつ増えている。子どもが同じおもちゃで楽しむ期間は、物にも依るかもしれないが、半年前後かもしれない。子どもの成長に合わせて不要になったおもちゃを友人の子どもに譲ってあげるという習慣は悪くない。
　さらに、近頃では「インターネットオークションで手に入れたが、動かない」と言って持ってくることがある。突っ込んで聞いて見ると、「品物の良否を確認することはできない」と言うケースや「これは動きません」というコメント付きで売買が行われることもあるらしい。
　こうして持ち込まれたおもちゃを直してあげると、世の中の良い習慣に寄与しているよう

な気がするが、たまに疑問を感じてしまうこともある。

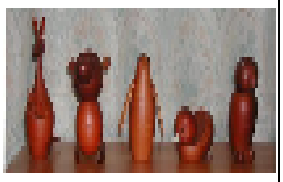
この手のおもちゃを手提げ袋にいっぱい入れて持ってくる人がいる。受付をしながら問診していると、「もしかするとこの人は自分で使うのが目的ではなく、どこかへ・・・？」と疑いの念を感じることもある。

でも、それを追求してしまう訳にはいかず、ぐっと飲み込むこともある。

親子連れで入ってくる患者さんを注意深く観察していると時々見えるものがある。紳士的な対応をする親が連れて来る子どもは、帰りに自然に「ありがとう」という言葉が出てくる。高圧的な姿勢や、要領を得ない説明をする親が連れて来る子どもの中には、この言葉が聞かれないことが多い。

子どもは、日々の親の行為・行動を見て、それを見本として知恵を付けて育って行く。これは人間にのみならず動物の世界でも同じようである。わが身を顧みてハッとすることがある。

＜７＞少しだけ事例紹介

プラレール	ラジコンカー	ロボット Wall-E	クリフォード君
電池の裏ぶたが壊れた →下敷を加工して取付	電源ｽｲｯﾁが錆びて崩壊→ｽｲｯﾁ交換	片眼が光らない →LED の配線が断線	動かない→ｺﾝﾄﾛｰﾗのﾜｲﾔ断線・電池ﾎﾞｯｸｽ修理
			
カラオケボックス	クレーン車	木の人形達	ぽぽちゃん
マイクの電線が断線 →ﾏｳｽのｹｰﾌﾞﾙを代用	梯子の支点が割れた →銅板を接着して補強	鼻、耳、手等が取れた→木を加工して取付	脚が取れた→膝関節整形手術

◆ 関連情報

日本おもちゃ病院協会　http://toyhospital.org/

千葉おもちゃ病院　http://chiba-toy-hospital.web.officelive.com/default.aspx

以上